

ねん がつ ついたち
2021年5月1日

ふっかつせつだい しゅじつ
復活節第5主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

し とげんこうろく かいしん どうしょ かれ ほかがい てさき おそ で し
使徒言行録は、回心したパウロが、当初は彼を迫害の手先として恐れていた弟子たちか
ら受け入れられ、その出来事を通じて教会が、「平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受
け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えて」いった様子を記しています。

かみ すく けいかく じんち こ ほうほう じょうじゅ みち
神の救いの計画は、人知をはるかに超えた方法を取りながら、成就する道をたどること
を、あらためてわたしたちに認識させます。同時にわたしたちは、その人知をはるかに超
える道は、聖霊によって導かれていることも知っています。

きょうかい せいれい みちび だいに こうかいぎ きょうかいけんしょう ごしゅんさい
教会は、聖霊によって導かれています。第二バチカン公会議の教会憲章は、五旬祭
の日に遣わされた聖霊が教会を導き続けていることを明確に指摘し、「聖霊は福音の力
を持って教会を若返らせ、絶えず新たにし、その花婿との完全な一致へと導く」と記
しています。(4)

てがみ なか かみ おきて まも ひと かみ うち かみ ひと うち
ヨハネも手紙の中で、「神の掟を守る人は、神の内にもいつもとどまり、神もその人の内
にとどまってください。神がわたしたちの内にとどまってくれることは、神が与
えてくださった“霊”によって分かります」と記すことで、教会に働き、教会を導き続
ける聖霊の働きを明確にします。

ふくいん しゅ じしん き えだ つら
ヨハネ福音は、主ご自身がぶどうの木であり、わたしたちは枝として連なっているのだ
という話を記します。主イエスは、「ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分
では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実
を結ぶことができない」と指摘されます。

えだ き しゅ かぎ ゆた み むす
枝は、ぶどうの木である主イエスにつながっている限り、「豊かに実を結ぶ」ものの、ど
のような実を結ぶのかは、枝の自由にはなりません。すなわち、わたしたちが幹である主
に枝としてつながると言うことは、自分が生み出したい実りを生み出すためではなく、主

のぞ みの おも あた みの
が望まれる実りを、主に与えられるがままに実らせることであります。

わたしたちはこのことを理解しているでしょうか。信仰を深めたとき、自分自身がよしとする理想を、真の実りと取り違えてしまうことはないでしょうか。豊かな実りは、主の実りであって、わたしたちの実りではありません。しかもその実りは、教会を導く聖霊による実りでもあります。聖霊は人知をはるかに超える方法で、教会に実りをもたらします。仮に、自分の理想を実りだと思い違いをするならば、それは教会に働く聖霊の導きを否定することにもなりかねません。

せいれい みちび ぜんぶく しんらい よ みずか りそう こしゅう かみ み て
聖霊の導きに全幅の信頼を寄せ、自らの理想に固執することなく、神の御手にすべてをゆだねたのは、聖母マリアでありました。

きょうかい がつ せいぼ つぎ いの すす せい
教会は5月を聖母の月として、ロザリオの祈りをささげるよう勧めています。パウロ6世は第二バチカン公会議後の典礼改革のなかにあつて、聖母への信心の重要性を説いた「マリアーリス・クルトゥス」に、「ロザリオは天使による喜ばしいあいさつとおとめの敬虔に満ちた承諾から始まって、福音からインスピレーションを受けて、信者がそれを唱えるべき態度を示唆しています」と記し、聖母が「お言葉通りにこの身になりますように」と神の御手にご自身をすべてゆだねた態度に倣うように勧めています。また教会は伝統的に、人類が危機に直面するとき、聖母の取り次ぎを求めて、祈りをささげてきました。コロナ禍の今、わたしたちはこれまで以上に祈らなくてはなりません。

せいぼ なら せいれい みちび ゆうき も み まか じぶん みの
わたしたちは、聖母に倣い、聖霊の導きに勇気を持って身を任せましょう。自分の実りではなく、主の実りを生み出す枝でありましょう。